

- 389に収録) 忘れえぬ人——その二 「小黒板」第9号 p.1~3, 1958年4月 (『中国へ向け
る橋』p.392に収録)
- 30033 燕京大學の落成式 「文藝春秋」第20巻第1号, 昭和17年新年号, p.8~9, 東京, 文藝春秋社, 昭和17年1月
- 30034 郭沫若氏に答える 「人民文学」第2巻第11号, 1951年12月号, p.51, 東京, 人民文学社, 1951年12月
- 30035 天文台で口述試問 『私の卒業論文』東京大學学生新聞会編, p.100~103, 東京, 同文館, 1956年12月 (『新火』(くろしお出版)p.20, に「わたくしの卒業論文」として収録) もと「東京大學新聞」179号, 1954年1月11日, 3p. →29052
- 30036 翼の一夜 「青淵」第103号, 昭和32年10月号, p.2~3, 東京, 浪沢青淵記念財団竜門社, 昭和32年10月, (『新火』) p.28に収録) →29052
- 30037 南波山のユキ (ふるさとの思い出—少年のころ) 『少年少女文学風土記 ふるさとを訪ねて(8)新潟』小川未明編, p.210~211, 東京, 泰光堂, 昭和35年4月
- 30038 甲詞(1955年1月19日付) 宅見晴海記念会遺稿集編集委員会編, 『不毛のものに挑みて』p.1~2, 1955年12月16日
- 30039 甲辞 「をみなへし」第15号 (創立60周年記念号) p.182~183, 新潟女子工芸高等学校, 昭和36年2月
- 30040 すれちがひ 『三木清全集, 第2巻』月報, p.1~3, 東京, 岩波書店, 1966年11月
- 30041 郭沫若 『中国古代の思想家たち』上・下 野原四郎・佐藤武敏・上原淳道訳, 岩波書店, 上巻, 1953年8月10日, 下巻, 1957年7月15日, 上下巻とも訳稿を校閲。平野義太郎, 序にて言及。
- 30042 推薦のことば: 新中国そのものの縮刷版 『東京大學教養学部工藤監修 『新華半月刊全訳日本語版』パンフ』北底,

1959年3月

- 30043 一冊の本, 陶晶孫著 「日本への遺書」 『朝日新聞』昭和37年(1962)11月4日 (『一冊の本』朝日新聞本社学芸部編, 東京, 雪華社, 昭和38年5月, p.211~212に収録)
- 30044 すぐれた教師のすすんだ教室 「出版ダイジェスト」第440号, p.3, 梓会出版ダイジェスト社, 昭和38年(1963)5月1日(水)
- 「白水社シートブック」をすすめる」欄
- 30045 「到民間去」—伊藤武雄氏の『黄龍と東風』(国際日本協会, 昭和39年7月1日刊) にちなみて 「アジア経済旬報」1965年5月上旬号, 610号, p.1~3, 東京, 中国研究所, 1965年5月
- 30046 (対訳)わが道(1) 中国語翻訳教室訳 「中国語」1971年7月号, 第138号, p.34~36, 東京, 中国語友の会(大修館), 昭和46年7月
- 30047 (対訳)わが道(2) 中国語翻訳教室訳 「中国語」1971年8月号, 第139号, p.34~36, 東京, 中国語友の会(大修館), 昭和46年8月
- 30048 (対訳)わが道(3) 中国語翻訳教室訳 「中国語」1971年9月号, 第140号, p.33~35, 東京, 中国語友の会(大修館), 昭和46年9月
- 30049 (対訳)わが道(4) 中国語翻訳教室訳 「中国語」1971年10月号, 第141号, p.34~36, 東京, 中国語友の会(大修館), 昭和46年10月
- 30050 (対訳)わが道(5) 中国語翻訳教室訳 「中国語」1971年11月号, 第142号, p.11~13, 東京, 中国語友の会(大修館), 昭和46年11月
- 30051 中国語ひとすじの道 「言語生活」No.246, p.88~95, 昭和47年(1972)3月1日, 「人とことば」14」欄 (1971年12月21日インタビュー)
- 30052 不戦への決意を——日中友好によせて 「日中新報」1974年9月21日

倉石武四郎博士伝略

倉石武四郎博士は、新潟県高田市において明治30年9月21日に誕生した。倉石氏は高田の名家で、和漢の学に精しい人物を出し、たとえば桐蔭先生(謙, 典太)は安積長斎に学び、高田藩校の教授を勤めた。父昌吉氏は慶応義塾で福沢諭吉氏の教えを受け、のち郷里で商業を営み、昭和5年に死去し、母みか刀自は国文学を嗜み和歌を作ったが、昭和30年になくなった。兄弟すべて13人(4人は早逝)の中第7子で、4男にあたる。弟の五郎氏は、ドイツ文学者、海老郎氏は、地球物理学専攻。8歳のとき高田第二尋常小学校に入り、14歳で県立高田中学校に進み、大正4年卒業、同年第一高等学校1部乙類に入学。中学のころから和漢の古典を好み、一高在学中から中国文学を志し、大正7年東京帝国大学文学部に入学、支那文学を専攻、卒業論文は「恒星管窺」。大正10年卒業と同時に芝罘・上海・蘇州・南京・鎮江・揚州・杭州・紹興・寧波等に1か月旅行し、また特選給費生として文学部副手を兼ね、大正11年、進んで京都帝国大学大学院に転じ、主として狩野直喜博士の指導を受けた。また新城新蔵博士の指導で中国古典の天文史料を集めた。大正13年大谷大学文学部に助教授として出講(支那文学史等を講述)、また京都帝国大学附設第七臨時教員養成所の講師となり、この間、豊子夫人と結婚(4男2女を儲ける)。大正15年、京都帝国大学専任講師、翌昭和2年4月、助教授に任ぜられ、大正15年から「支那学」誌の編輯、のち「狩野教授遺著記念支那学論叢」(弘文堂書房, 昭3刊)の編纂に当った。

昭和3年3月、文部省在外研究員として北京に駐在、はじめ東城の延英舎に寓し、吉川幸次郎氏と同宿、のち西城の孫人氏宅に移り、北京大学・師範大学・中国大学に聴講

(呉承仕・錢玄同・孫人氏・馬裕漢・朱希祖ら諸氏の講義あり)、また雪橋講舎(楊毓義氏)において掌故を修め、北京滞在中の胡適・周樹人(魯迅)ら諸氏に会见、また山西(太原・崑崙・洪洞・曲沃・翼城・大交・閻喜など)に遊び、また別に、東方文化學院京都研究所のために書籍(天津の陶湘氏の蔵書)購入に尽瘁(これによって同所所蔵の漢籍中、叢書の部の基幹が形成された。のち狩野直喜所長の下において、同所漢籍目録・同分類目録が編纂されたが、このことにも参与した)。その後、昭和5年6月に至り、北京を離れて上海に遊び(章炳麟氏を訪問、かねて無錫・常州・南京(董仇氏を訪問、八千卷樓の書籍を閲覧)を巡ったが、病のため旅行を中止し、8月帰国した)。

帰国後、京都帝国大学において清朝音学・清朝音学などを講ずるほか、魯迅(『吶喊』など)を講読、また中国語教育を推進、多くの教科書を著わした。昭和14年に至り、学位請求論文「段憲堂の音学」によって文学博士の学位を受け、同年4月、京都帝国大学教授に任じ、東京帝国大学講師として出講、翌15年からは東京帝国大学教授を兼ねた。

これより先、昭和6年より東方文化學院京都研究所の研究員を兼ね、研究「礼疏校勘」のもとに儀礼疏の校定を行い、昭和12年1月「儀礼疏攷正」を完成、研究所に報告した。また同所経文学研究室主任としては、尚書正義校定の事業を始め、のちに主任を退いたが、そのための会議には常に参加した。

さて東西両大学兼任のころ、国語審議会委員等を依頼され、昭和18・19・20年には有栖川宮奨学資金を受け(高田久彦氏と共同)、「現代呉語の研究」を行った。また戦後は東京大学理工学研究所の小幡重一博士とともに、同所の施設によって中国語方言の実験的研究を開始、一方では近畿一帯の古寺院に伝わる仏典誦誦方法から唐代古声調を探究した。中国語学研究会(現、中国語学会)を結成したのは、昭和21年10月である。結成以来、終

7.9.12.21

7.9.12.21

野区上高田四八十一

始その会長に在任（昭和50年10月まで）した。
 昭和24年5月、東京大学教授専任として東京に移り、また日本学術会議の第1期会員に当選、日本中国學會結成の事に参与。25年からは中国語講習会を主宰（25年は日中友好協会の名により、翌年より博士個人の倉石中国語講習会となり、会長として昭和42年9月の解散にまで及ぶ）、初めてラテン化新文字を教育に採用、28年からはNHK第2放送の中国語入門講座を担当（31年に及ぶ）。29年秋、中国学術文化視察団の一員として新中国（北京・西安・上海・杭州・広東）を見学した。この間、東京大学文学部に「中国の文化と社会に関する諸問題」の講義を開き（25年以降）、また「中国の變革期における社會・經濟・文化の相關關係の研究」委員会（26年以降、文部省科学研究費による）を主宰、かたわらその言語文字問題の研究を担当、また、北方語研究会を結んで人民文藝叢書の方言を摘出・研究、また別に「ラテン化新文字による中国語辞典」を編纂・出版した。

昭和33年3月、東京大学教授を定年退官し、その名誉教授となった（のち、京都大学名誉教授をも連称）。一方、昭和30年6月より「中国語」誌を發刊し（現在に及ぶ）、中国語の普及につとめ、引きつづき新たに制定された漢語拼音方案による中国語辞典の編纂に全力を傾注し、昭和38年9月『岩波中国語辞典』を公刊するに至った。この間、昭和35年春、中国の文字改革視察のため、日本学術代表团として中国を訪問。

昭和39年10月、小石川の善隣学生会館に中国語専修学校「日中学院」を設立し、終身その学院長として、教育と経営に力を尽くした。みずから中国語初級・中級を担当し、その教科書「中国語のくみため」などを編み、かたわら学院の講師のために語学概説を説き、ながく段玉載「説文解字注」を講じた。また、学校経営に伴う種々の困難に際し、身をもつて事に当たり、「倉石中国語講習会」が昭和

42年の善隣学生会館事件のあと、同年9月解散のやむなきに至ったが、「日中学院別科」としてその学習の場を存続させ、各方面の支持を得た。

昭和49年「中国語の研究と教育および辞典の編纂」により朝日文化賞を受賞したが、その後より痛風と脳血栓をわずらい、同年9月東京都養育院附属病院に入院、翌50年（1975）11月14日、屢次の脳血栓のすえ逝去した。享年、79歳。豊子夫人は、昭和53年6月、博士と同じ病院でなくなった。

博士は、中国の古典に深い造詣をもち、こゝとに清朝小学、清代に發達した古代中国語研究について、西欧近代言語学の方法を加えて検討する新しい研究方法を開拓した。その一方、現代中国語について、諸方言に至るまで綿密な調査と研究を進め、その基礎の上に中国語教育に独自の方法を樹立しようとした。また、各種の語学辞典と教科書の編纂を企て、その一部を完成し、進んで中国語専修の学校を創設して中国語の普及と向上に、後半生を捧げた。

かつて中国語文献は、現代中国語のものはその語音で読み、古典文には返り点・送りながを附していわゆる漢文訓読を行うのが通例であったが、博士の信念は、訓読法を一切排除し、古典語も現代語もひとしく中国語音によって中国語として読解することにあった。その努力により、遠古から現代に至る中国語文献は、すべて外国語である中国語として読み、かつ理解する方法が確立され、中国文学を外国文学として研究する態度をわが国に定着させた。同時に、従来とかく通商などの実用面に偏っていた現代中国語に対する研究と教育に、学問的な検討を加えられた。

博士の著大な蔵書は、現在すべて移って東京大学東洋文化研究所にある。いま「倉石文庫」として整理中である。1979.9.21
 （頼惟勤・戸川芳郎）